

イエス・キリストの啓示 - 第十七

乾いた骨を呼び覚ます：待ち望む時における清さと信仰への呼びかけ

Jeff Pippenger

2023-11-17

通りに死に絶えて横たわる干からびた骨が、荒野で叫ぶ者の「声」を聞くのは、慰め主が来られ、イエスが彼を遣わすと約束されたことが成就したからである。ミラー派の最初の失望において、ミラー派は、自分たちが乙女たちのたとえの「遅延の時」にいることを悟った。

失望した者たちは、聖書から、自分たちが遅延の時にあり、幻の成就を忍耐して待たなければならないことを悟った。彼らを1843年に主を待ち望むよう導いたのと同じ証拠が、1844年にも主を期待するよう導いた。『Spiritual Gifts』第1巻、153頁。

ミラー派によって象徴されている人々は最初の失望の経験を繰り返し、そうするとき、彼らもまた、乙女のたとえにおける遅延の時にいるのだと理解しなければならない。この真理を見ることができるのは、慰め主の働きによってのみである。慰め主によってもたらされたその認識は、干からびた死んだ骨の谷に向かって宣べるようエゼキエルに命じられた最初の預言によって表されている。

彼はまた私に言った。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言え。乾いた骨よ、主の言葉を聞け。神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ、わたしはあなたがたのうちに息を入れる。そうすればあなたがたは生きる。わたしはあなたがたに腱を付け、あなたがたに肉を生じさせ、皮であなたがたを覆い、あなたがたのうちに息を入れる。そうすればあなたがたは生き、あなたがたはわたしが主であることを知る。」そこで、私は命じられたとおりに預言した。私が預言していると、音がして、見よ、震えが起こり、骨と骨とが互いに合わさった。私が見ると、見よ、彼らの上に腱が張り、肉が生じ、その上を皮が覆った。しかし、彼らのうちには息がなかった。エゼキエル書 37:4-8

「騒ぎ」は聖霊を表している。その時点で乙女たちは、自分たちが遅延の時にいることを認識する必要がある。自分たちが遅延の時にいると認識したとき、失望した者たちが何をすべきかについての聖書の指示は豊富にある。エレミヤは、彼らは「あざける者の集い」に決して戻ってはならないと教えているが、それはフィラデルフィアへのメッセージではサタンの会堂である。彼らはまた、尊いものと卑しいものを分けなければならない。尊いものと卑しいものの対比には二重の意味がある。

私は何年も前、ウィリアム・ミラーの夢を適用したときに、この預言的な区別を自ら学んだ。私は宝石を神の言葉の真理、偽の宝石を墮落した教理と正しく定義した。その後、ジェームズ・ホワイトもウィリアム・ミラーの夢を適用しており、彼の適用では、宝石を神に忠実な民、偽の宝石を真理を公言する偽りの者たちと見なしていることが指摘された。私がジェームズ・ホワイトがその夢について何を教えていたかを調べたとき、私たちはどちらも正しいのだと気づいた。宝石は神に忠実な者たちを表し得るし、偽の宝石は

不忠実な者たちを表し得る。しかしまた、宝石は神の言葉の真理を表し得るし、偽の宝石は偽りの教理であり得る。ジェームズ・ホワイトは、当時彼自身が生きていた時代の歴史にミラーの夢を適用したが、私はその夢を終末時代の歴史として捉えていた。この二つの適用は合わせて、人は自分の信じるものに成っていくこと、そしてもし誤った教理に固執するなら、彼らはその教理と結びついたまま、ほこりを払う男によって窓の外へと掃き出されるだろう、ということを示している。私たちは食べるものでできている。

失望した人々が自分たちが待ちの時期にあることに気づくとき、エレミヤによると、彼らは尊いものを卑しいものからより分けるべきである。

「神の統治と戦っている人々は、どうして時に示すあの知恵を身につけることができるのだろうか。サタン自身も天の宮廷で教育を受け、悪だけでなく善についての知識も持っている。彼は尊いものと卑しいものを混ぜ合わせるが、まさにそれが彼に人を欺く力を与えている。しかし、サタンが天の輝きの衣をまとっているからといって、私たちは彼を光の天使として受け入れるべきだろうか。誘惑者には、その方法に従って教育され、その霊に鼓舞され、その働きにふさわしく整えられた手先たちがいる。私たちは彼らと協力すべきだろうか。教育を身につけるために不可欠なものとして、彼の手先の著作を受け入れるべきだろうか。」 Ministry of Healing, 440.

尊いものと卑しいものは、真理と誤りを表している。また、それは二種類の人々をも表している。

「それにもかかわらず、神の土台は確固として立っており、この刻印がある。主はご自分のものを知っておられる。また、キリストの名を呼ぶ者は皆、不義から離れよ。だが、大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあり、尊ばれるものもあれば、卑しまれるものもある。」 『大きな家』は教会を表している。教会には卑しいものも尊いものも見いだされる。海に投げ入れられた網は、良いものも悪いものも集める。レビュー・アンド・ヘラルド、1901年2月5日。

エレミヤは、もし立ち帰るなら、愚かなおとめから分離し、また愚かなおとめの誤った教えからも離れなければならないと教えられた。十四万四千人とは、完全な一致に至る者たちである。エレミヤは、エゼキエルの四つの風に関する第二のメッセージによって封印されるように召された者たちが、幻が語るときに神の「口」となるために成し遂げなければならない働きを表している。裁きが到来したとき、その幻はミラー派の歴史の中で語った。また、地の獣が語り、第三の災いの裁きが到来するとき、その幻は十四万四千人の歴史の中で語る。そのとき、エレミヤによって示された働きを成し遂げた者たちは、神の見張り人として立てられる。

主が、失望した者たちを死から目覚めさせるために慰め主を遣わすとき、主は、彼らが日曜法の危機において御自分の代弁者となるために成し遂げなければならない清めの働きを示される。イザヤはエレミヤの助言に同意する。

良い知らせを伝え、平和を告げ、幸いの知らせを伝え、救いを告げ知らせ、シオンに向かって「あなたの神は統べ治めておられる！」と言う者、その足が山々の上に何と美しいことか。あなたの見張りたちは声を上げ、声をそろえて歌う。主がシオンに帰られるとき、彼らは目と目を合わせて見るからだ。エルサレムの荒れ跡よ、ともに歓声

を上げ、共に歌え。主はその民を慰め、エルサレムを贖われたからである。イザヤ書
52:7-9

「良い知らせをもたらす」者や「平和と救いを告げる」者たちは、「声をそろえて」声を上げる。彼らは「目と目を合わせて見るであろう」からである。

私には、私が述べた者たちと影響力を合わせているほかの数名も示された。彼らは協力して、共同体から人々を引き離し、混乱を引き起こすためにできるかぎりのことをしており、その影響力は神の真理の評判を落としている。イエスと聖なる御使いたちは、神の民を一つの信仰へと導き、結び合わせ、皆が同じ思いと同じ判断を持つようにしておられる。そして、彼らがこの時代の厳粛で重要な真理について見解を一致させ、信仰の一致へと導かれている間に、サタンはその前進に対抗して働いている。イエスはご自身の器を通して集めて一つにしようとして働いておられる。サタンは自分の器を通して、散らし、分裂させようとして働く。「見よ、わたしが命じる。わたしはイスラエルの家を、すべての国々の間で、ふるいで穀物をふるうようにふるいにかけて。しかし、最も小さな粒も地に落ちることはない。」

神はいま、ご自身の民を試し、吟味しておられる。品性が形成されつつある。御使いたちは道徳的価値を量り、人の子らのすべての行為を忠実に記録している。神を信じると称する民の中にも堕落した心がある。しかし彼らも試され、吟味される。すべての者の心を見通される神は、人々が最も疑いを抱かないところに潜む暗闇の隠れた事柄を明るみに出される。それは、真理の前進を妨げてきたつまずきの石が取り除かれ、神がご自身の掟と裁きを宣言する清く聖い民を持たれるためである。

私たちの救いの隊長は、ご自分の民を一步一步導き、彼らをきよめ、天に移されるのにふさわしく整え、群れから離れようとする者、導かれることを望まず自分の義に満足している者たちを後方に残される。「それゆえ、もしあなたのうちにある光が暗闇であるなら、その暗闇はいかに大きいことか！」人の心を欺く妄想でこれより大きいものはない。すなわち、人に自己過信の霊を抱かせ、自分は正しく光のうちにいると信じ込ませつつ、実は神の民から離れさせ、彼らが大切にしている光が暗闇であるときにもそれを光と信じさせるような妄想である。『証言』第1巻、332、333頁。

イザヤ書の該当箇所では、「良き知らせをもたらす」という句が二度繰り返されており、真夜中の叫びの歴史を指し示している。同様に、尊いものが卑しいものから分けられるときに成就する一致についてのイザヤの描写へと導く諸節も、同じく真夜中の叫びの歴史を指し示している。

目を覚ませ、目を覚ませ。力をまとえ、シオンよ。聖なる都エルサレムよ、麗しい衣をまとえ。これから後、無割礼の者と汚れた者は、もはやあなたの中に入って来ない。塵を振り落として起き上がれ。座に就け、エルサレムよ。首の縄目を解け、捕囚の娘シオンよ。イザヤ書 52:1、2。

エレミヤは、最初の失望の中にあって、自分たちが待機の時にいることを悟っている人々を表している。イザヤはその同じ人々に「目を覚ませ、目を覚ませ」と命じる。彼らは目を覚まし、ついには尊いものと卑しいものを分ける働きを成し遂げ、神の教会にはもはや割礼を受けていない者も汚れた者もない段階に至る。「主は、ご自分の裁きがさら

に顕著に世界に下る前に、ご自分の教会が清められることを望んでおられる。」

私たちは、地上の歴史の終わりに急速に近づいている。終わりは非常に近く、多くの人が思うよりはるかに近い。私は、私たちの民に、主を切に求める必要があることを訴える重荷を感じている。多くの人々が眠っており、彼らを肉的な眠りから目覚めさせるために何と言えよいのだろうか。主は、ご自分の裁きがさらに著しくこの世に下る前に、ご自分の教会が清められることを望んでおられる。

「彼の来るその日に誰が耐え得ようか。彼が現れるとき、誰が立ち得ようか。彼は精錬する者の火のようであり、漂白する者の灰汁のようである。彼は銀を精錬し清める者として座し、レビの子らを清め、彼らを金や銀のように精錬して、彼らが義になつて主に供え物をささげることができるように。」

キリストはあらゆる虚飾の衣を取り去る。真実と偽りを取り混ぜても、彼を欺くことはできない。彼は「精錬する者の火」のように、尊いものを卑しいものから、滓を金から選り分ける。

レビ人のように、神に選ばれた民は、神ご自身によってその特別な働きのために聖別されている。真のキリスト者は皆、祭司職を帯びている。天の父の御性質を世に表すという聖なる責務を委ねられるという光栄にあずかっている。次の言葉に十分に心を留めるべきである。「それゆえ、天におられるあなたがたの父が完全であるように、あなたがたも完全でありなさい。」

しかし、わたしの名を畏れるあなたがたには、義の太陽がその翼に癒しを携えて昇る。あなたがたは出て行き、牛舎の子牛のように育つ。あなたがたは悪しき者どもを踏みつける。わたしがこのことを行うその日には、彼らはあなたがたの足の裏の下で灰となる、と万軍の主は言われる。

「わたしのしもべモーセの律法を心に留めよ。これは、わたしがホレブで全イスラエルのために彼に命じた掟と定めである。見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父の心を子に向けさせ、子の心を父に向けさせる。わたしが来て、のろいでこの地を打つことのないように。」 Review and Herald、1906年11月8日。

偽りの教義に固執する者たちは、荒れ野で叫ぶ「声」から始まる歴史において分離される。神の創造の力が個人的な聖化の経験を生み出すことを受け入れない者たちは、荒れ野で叫ぶ「声」から始まる歴史において、「金」から分離される。彼らは、ラオデキアがフィラデルフィアへと移行するまさにその地点で、ラオデキア人のままでとどまる。

尊いものを卑しいものから分ける働きは、レビの子らを清めるために突然来る契約の使者の働きによるものがほとんどであるが、私たちも参加しなければならない。

それゆえ、わたしの愛する者たちよ、あなたがたがいつも従ってきたように、わたしがいるときばかりでなく、今はわたしがいないときにはなおさら、恐れおののきつつ自分の救いを達成しなさい。あなたがたのうちに働き、御心のままに願わせ、また行わせてくださるのは神なのです。何事でも、不平を言ったり言い争ったりせずに行いなさい。そうすれば、曲がってよこしまな民のただ中であって、非難されるところの

ない、傷のない神の子らとなり、彼らの間で、この世にあって光として輝く者となります。ピリピ人への手紙 2:12-15.

エレミヤは、来たるべき裁きにおいて神の代弁者となることを望むなら、尊いものを卑しいものからより分けるように告げられた。エレミヤが自分への神の助言を聞いていたという事実は、彼がその務めを引き受けるなら、慰め主のご臨在がすでに備えられていることを示していた。

救いを得るわざは、共同の働き、すなわち協働である。神と悔い改めた罪人との間に協力がなされなければならない。これは、品性に正しい原則を形成するために必要である。人は、完全に至るのを妨げるものを克服するために、熱心な努力を払わなければならない。しかし、成功のためには全く神に依存している。人間の努力それ自体では十分ではない。神の力の助けなしには、何の役にも立たない。神も働き、人も働く。誘惑への抵抗は人から出なければならないが、その力は神から受けなければならない。一方には無限の知恵と憐れみと力があり、他方には弱さと罪深さと全くの無力がある。

「神は、私たちが自分自身を支配する力を持つことを望んでおられる。しかし、私たちの同意と協力なしには、神は私たちをお助けになることができない。聖霊は、人に与えられた力と諸能力を通して働かれる。私たち自身の力では、私たちの目的や願い、傾向を神の御心に調和させることはできない。しかし、もし私たちが『進んで従う者とされることを望む』なら、救い主は私たちのためにこれを成し遂げてくださる。『神の知識に逆らって自らを高くするあらゆる論議とあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべての思いを捕らえてキリストに従わせる』。コリント人への第二の手紙10章5節。」使徒行伝、482.

黙示録の十一章にある三日半、すなわち干からびた骨が通りで死んでいるときは、「荒野」の象徴であり、「荒野」はレビ記二十六章の「七つの時」を表している。三日半の散らしの終わりに、十四万四千人の中に加わるように召された者たちは、「目を覚まし」「塵を払い落とす」べきである。ホワイト夫人はこう言っている。「主は、ご自身の裁きがこの世にさらに著しく下る前に、ご自身の教会が清められることを望んでおられる。」

「清められた教会」に関連して、彼女は「卑しいものから尊いものをより分ける」というエレミヤの分離の過程に言及する。彼女はまた、それをマラキ書第3章とも結びつける。そこでは、契約の使者のために道を備える使者が語られている。道を備えるその使者は、イザヤの「荒野で叫ぶ者の声」である。契約の使者はキリストであり、彼は十四万四千人と契約に入る備えをしている。彼らは「レビ人」のように、「彼の特別な働きのために彼によって聖別されている」。彼女は次に、彼らを祭司だとし、イエスの「だから、天の父が完全であられるように、あなたがたも完全でありなさい」という言葉を引用する。

「遅延の時」の期間の終わりには、清めの過程が定められている。というのも、主は十四万四千人に成し遂げさせる特別な働きをお持ちであり、「その裁きがいっそう顕著に世に下る」前に、主は清められた教会をお持ちになるからである。主の裁きはすでに世に臨んでいるが、日曜法の時に「神の破壊的な裁き」が下り始める。

それらの裁きは、「これまで真理を知らなかった人々にとっての憐れみの時」である。だが、必要な清めの過程に入ろうとしない者には、その裁きには憐れみがない。「より顕著に下る」と言われる「裁き」とは、しるしとなる裁きを指している。それらは合図を表しており、聖霊は、その裁きによってもたらされる混沌と混乱を用いて、「偽りの安息日」を守る者と「良心的に主の安息日を守る」者との間の区別を明らかにする。というのも、これこそが「世界が警告を受ける」唯一の方法だからである。合図となる裁きは、なおバビロンにいる神の子らが十四万四千人の旗印を認めるようにと、聖霊が用いる背景となる。

しかしホワイト夫人は、単にマラキ書第3章に言及するだけではなく、マラキ書第4章の結びの節も取り上げ、契約の使者のために道を備えるべき「声」に再び言及している。これらの結びの節は契約の使者の準備についてではなく、モーセの律法を覚えること、そして父の心を子に、また子の心を父に向けることについて語っている。「声」はまず、契約の使者であるキリストが突然ご自分の宮に来られ、失望していたが目を覚まされたご自分の民をきよめて、彼らが旗印の働きを成し遂げられるようにするための備えをする。続いてマラキは、その「声」の働きの別の側面を取り上げている。

彼は「父の心を子に、子の心をその父に向ける」し、ホレブで与えられた律法に関連してこの働きを行う。イザヤの「声」でもあるエリヤは、神の民の罪を明らかにするだろう。それは清めの過程の一部である。罪の定義はただ一つ、ホレブで与えられた律法を犯すことだ。バプテスマのヨハネはエリヤであり、彼の働きにはまさにその要素が含まれていた。

そのころ、バプテスマのヨハネがユダヤの荒野に現れ、「悔い改めなさい。天の御国が近づいたからだ」と宣べ伝えた。この人こそ、預言者イザヤが「荒野で叫ぶ者の声」がする。主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」と言っていた者である。また、このヨハネは、らくだの毛の衣をまとい、腰に革の帯を締め、食物はいなごと野蜜であった。すると、エルサレムとユダヤ全土、またヨルダン川の周辺一帯から人々が彼のもとへ出て来て、罪を告白してヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。ところが、パリサイ人やサドカイ人の多くが彼のバプテスマを受けに来るのを見て、彼は彼らに言った。「まむしの子らよ、来たるべき怒りから逃れるようにと、だれがあなたがたに警告したのか。」

それゆえ、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。心の中で「私たちには父としてアブラハムがいる」と言おうと思っはならない。あなたがたに言うが、神はこの石ころからでもアブラハムの子らを起こすことができになるのだ。斧はすでに木の根元に置かれている。だから、良い実を結ばない木はみな切り倒され、火に投げ込まれる。私は悔い改めのために水であなたがたにバプテスマを授けているが、私の後から来る方は私よりも力ある方で、私はその方の履物をお持ちする値打ちもない。その方はあなたがたに聖霊と火でバプテスマをお授けになる。その手には箕があり、ご自分の打ち場を徹底してきよめ、小麦を倉に集め、もみ殻は消えることのない火で焼き尽くされる。マタイによる福音書 3:1-12。

バプテスマのヨハネは、黙示録11章の三日半の「荒野」にやって来た。というのも、すべての預言者は、自分たちの生きていた時代よりも終わりの日々についてのほうを多く語

っているからである。彼は、天の御国が近づいたので罪から悔い改めよというメッセージを携えて来たが、それは「時が近い」ときにイエス・キリストの啓示が開かれるのと同様である。バプテスマのヨハネは「声」の働きを示している。というのも、イエスによれば、彼は来るべきエリヤでもあったからである。

すべての預言者と律法は、ヨハネの時まで預言しました。もしあなたがたが受け入れるなら、この人こそ来るべきエリヤです。聞く耳のある者は聞きなさい。マタイの福音書 11:13-15.

イエスは、バプテスマのヨハネの預言者としての身分が一つの試金石であったことを明らかにされる。イエスは率直に「もしあなたがたがそれを受け入れるなら」と言われる。さらにイエスは、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言って、弟子たちにそれを受け入れるよう励まされる。何を聞くのか。聖書における最後の荒野に来るその声が誰であるのか、そして契約の使者が神の顕著な裁きの時に特別な働きをするよう十四万四千人を備えるための道を整える者が誰であるのか、を聞きなさい。

ヨハネは「らくだの毛の衣をまとい、腰に革の帯を締め、食物はいなごと野蜜であった」。彼の「食物」はイスラムのメッセージであった。なぜなら、「いなご」という語はイスラムを表し、蜜は彼の口に甘かった神の言葉を表すからである。彼が食べた甘いメッセージは、「野生の」アラビアのろばについてのものであり、これは聖書におけるイスラムのまさに最初の象徴である。「いなご」でも表されるイスラムの野生のアラビアのろばの甘いメッセージは、彼の衣にも織り込まれていた。というのも、らくだもイスラムのもう一つの象徴だからである。たとえヨハネが食べた食物が昆虫ではなく「いなごの木」を指していたとしても、「いなご」という語をイスラムの象徴として用いるのは言葉の曲解ではない。「いなご」という語はイスラムの象徴であり、ヨハネは物理的な食物を食べることを表していたのではない。彼の食事は、彼が食べた預言的メッセージの象徴であった。

彼の帯は、ハバククにおいて示された「預言」であった。その預言は、聖なる図表に示されたとおりに、最初の失望、乙女たちの遅延の時、そしてアドベンチズムの基礎を一つに結び合わせる。ハバククは、それらすべての真理を結び合わせた預言的な帯であった。

この幻は、なお定められた時のためであり、終わりにはそれは語り、偽ることはない。たとえ遅れるようでも、それを待て。必ず来る。遅れることはない。見よ、高ぶる者の魂は彼のうちに正しくない。しかし、義人はその信仰によって生きる。ハバクク 2:3, 4

「声」の警告を構成する諸メッセージを帯のように一つに締め合わせた預言的メッセージは、遅れるがやがて語るその幻との関係における、十人のおとめのたとえである。真夜中の叫びの幻は、「その魂は高ぶっている」者である卑しい者と、信仰によって義とされる尊い者とを分け隔てる。信仰による義認こそ、「声」が締める帯である。

義はその腰の帯となり、忠実はその胸の帯となる。イザヤ書 11:5

2020年7月18日の失望の後、その失望の「荒野で叫ぶ者の声」が到来したとき、彼のメッセージは2001年9月11日以来ずっと同じものだった。来るべきエリヤから、待ち望みつつ

失望した死んだ干からびた骨たちへ向けられたそのメッセージは、イスラムは「合図となる裁き」であり、それがバビロンにいる神のほかの子らが義を学ぶための背景を与えるのだというものである。

正しい者の道はまっすぐです。まことに正しい方よ、あなたは正しい者の道をまっすぐにされます。主よ、あなたのさばきの道にあって、私たちはあなたを待ち望みました。私たちの魂の願いは、あなたの御名と、あなたを覚えることにあります。夜には、私の魂をもって私はあなたを慕い求めました。まことに、私の内にある霊をもって、私は朝早くあなたを尋ね求めます。あなたのさばきが地にあるとき、世に住む者は義を学ぶからです。イザヤ書 26:7-9

来るべきエリヤであったバプテスマのヨハネは、ヨハネの黙示録第十一章の三日半における「荒野」の「声」である。彼の務めには、魂が高ぶり、父祖の霊的遺産に頼りながらも、神の怒りがまさに臨もうとしていることを感じている、アドベンティズムの第四にして最後の世代を見分けることが含まれる。彼らが第四の世代であるのは、キリストとは正反対の世代として完全に現れてしまったからである。彼らは「まむしの子ら」の世代だが、それでもなお自分たちの父アブラハムを引き合いに出して、自分たちは実は小羊の世代なのだと主張する。小羊の世代とはペテロの言う選ばれた世代であり、小羊がどこへ行くにも従う者たちである。

ヨハネは、彼のメッセージを聞きに来た人々の罪をはっきりと示した。というのも、彼らは悔い改めてバプテスマを受けたからである。また、彼は、自分の後に来られる方がいて、その方はご自分の麦打ち場を徹底的に清めるのだと、彼らに告げた。その方こそ契約の使者であり、偽の硬貨や宝石を窓の外へ掃き出し、元の宝石を回復する「the dirt brush man」である。そうして回復された宝石は、第一の天使の運動においてウィリアム・ミラーが天使に導かれて元の宝石を集める働きをしたときよりも、十倍も明るく輝く。

バプテスマのヨハネは、ラオデキヤ的なアドベンチストが自分たちの父アブラハムに置く信頼を、真っ向から非難した。というのも、来るべきエリヤの務めは、父の心を子へ、またその逆に子の心を父へ向けることだったからである。聖書的適用における「初めと終わり」の原則はその働きに表されているが、同時に、敵の地にあつて散らされ、荒野で死んだ状態にあると自覚する者たちへの救済の手立てもまた示されている。彼らは自分たちの罪と父祖の罪を認め、悔い改めなければならない。自分たちと父祖の罪を認めるのと併せて、荒野における三日半の期間、主とともに歩んでこなかったことも認めなければならない。さらに、その歴史の間、神が彼らとともに歩んではおられなかったことをも認めなければならない。

あなたがたのうちに残された者は、あなたがたの敵の地で自分の不義のゆえにやせ衰え、またその父祖の不義のゆえにも、共にやせ衰えるであろう。もし彼らが、自分の不義と父祖の不義、すなわち彼らがわたしに対して犯した背き、またわたしに逆らって歩んだことを告白し、そして、わたしもまた彼らに逆らって歩み、彼らをその敵の地に連れ入れたことをも認め、そのとき、彼らの無割礼の心がへりくだり、自分の不義の刑罰を受け入れるなら、そのとき、わたしはヤコブとの契約を思い起こし、イサクとの契約をも、さらにアブラハムとの契約をも思い起こし、またその地を思い起こすであろう。レビ記 26:39-42。

その呪いは、彼らが土地の安息日を覚えていなかったためである。

来るべきエリヤであった洗礼者ヨハネは、黙示録11章の三日半における荒野の「声」を象徴していた。彼は、干からびた骨に、ホレブでのモーセの律法を「覚えよ」と呼びかけ、もし彼らがそうするなら、契約の使者が彼らの父祖の契約を「覚える」とした。ただしそれは、彼らが自分の罪と父祖の罪を告白し、さらにいっそうへりくだって、神に対して彼らが「そむいた」罪過を具体的に言い表す場合に限られた。

彼らはまた、自分たちが神に「反して」歩んできたこと、そして神が彼らに「反して」歩んできたことを認める必要がある。

彼らはまた、自分たちこそ黙示録11章の通りにある死んで乾ききった骨であることを認める必要があった。というのも、神が彼らを敵の地に導いたこと、そしてその敵の地は死であることを認めなければならなかったからである。

洗礼者ヨハネによれば、彼らは「荒野で叫ぶ声」が誰であるかという問いにも答える必要がある。というのも、ヨハネは「来たるべき怒りから逃れるようにと、誰があなたがたに警告したのか」と尋ねたからである。

これらのテーマは次回の記事で引き続き取り上げます。

神の僕である伝道者には、こう命じられている。『大声で叫べ、ためらうな。ラッパのようにあなたの声を上げ、わたしの民にその背きを、ヤコブの家にその罪を告げよ。』主はこの民についてこう言われる。『彼らは日ごとにわたしを求め、わたしの道を知ることを喜ぶ。義を行った国民のように。』ここに、自己欺瞞に陥り、自己義に満ち、自己満足している民がいる。そして、彼らにその背きを示すよう大声で叫べと、伝道者に命じられている。あらゆる時代に、この働きは神の民のためになされてきたが、今ほどこれが必要とされている時はかつてない。Testimonies, volume 5, 299.